

# 球磨川の下流から

荒瀬ダム問題を考える

—連載その⑦

つる 詳子 (環境カウンセラー)

## 魚湧く不知火海の過去と未来 輝く流域のために



昭和40年代のアサリ漁。1日1000kg(1軒当たり)の漁獲量があったが最近では60g以下と激減している。

荒瀬ダムの撤去は、八代海の漁業者の希望でもありません。八代海の漁獲量の減少は、荒瀬ダム建設だけの影響と断定することはできませんが、減少する漁獲量と漁業者の数に、「打開策は、荒瀬ダム撤去に希望を託す以外に道がない」という理由は、切羽詰まった

思いだけでなく、荒瀬ダム等に堆積した土砂の分だけ、八代海の干潟が後退してきているという事実があるからです。しかし、平成15年設置された「荒瀬ダム撤去検討委員会」においてさえ、「荒瀬ダム撤去の影響は、遥拝堰地点までしか及ばない」として、八代海への影響につ

いては認めようとしませんでした。川と海の関係は、科学的にも明らかになりつつある現在、熊本県においても、ダム撤去が八代海にどのような変化を与えるのか、調査を行い、データの蓄積を行うことは不可欠です。そのためには、荒瀬ダムが建設される前、及び建設後の八代海についての調査を行うこともまた求められています。

### 球磨川とダムの影響を強く受ける八代海

有明海に注ぐ一級河川が8河川あるのに対し、八代海に流入する一級河川は球磨川のみです。面積約1200平方キロの八代海に注ぐ球磨川の流域面積は約1800平方キロであり、八代海の総容量に占める年間の淡水流入量は30%にも及ぶといえますので、強く球磨川の影響を受けていることが想像されます。大雨時、球磨川河口から吐き出される大量の淡水が、海水の上に乗っかって対岸の天草に届くとき、その淡水層の厚さは

5〜6mあるといえます。そのため、淡水に弱い生き物は大きな影響を受けます。対岸天草では、真珠養殖が行われていますが、荒瀬ダムの放流があると、急いで養殖筏を下げなければなりません。適度な塩分濃度には対応できないアコヤガイは、塩分濃度が下がりすぎると生息できないため、必要な濃度の深さまで筏を下げる必要があります。濃度を測りながら、大雨の時は5〜6層以上上げられることも珍しくありません。それ以上は下げられないために、船上で筏を引っ張って、球磨川の影響を受けない場所まで移動することもあります。

また、球磨川河口で、アオノリの養殖が行われていますが、塩分濃度が低くなると、ちぎれて流されてしまうため、荒瀬ダムの放流の知らせが入ると、やはり大急ぎで網の位置を水面より深く下げなくてはなりません。養殖真珠の場合もアオノリの場合も、自然の雨であれば、雨の降り方から、影響を予測して、ゆっくり

対応することができのに対して、人の操作によるダムの放流は天気に関係なく行われるので、対応が間に合わなく被害が出ると、漁業者はいいいます。

水量以上に影響があるのが、ダム湖による堆積土砂による影響です。元東海大学教授の宇野木早苗氏は、球磨川本流に建設されたダムに堆積する土砂の量は、厚さ50センチの干潟1000センチの面積に値すると試算しています。実際、ここ50年で、球磨川の影響を受ける沿岸部の干潟は1000センチ以上減少しています。ダム湖に多量に堆積する土砂がある以上、ダムが干潟に影響を与えないという説明はなんの説得力も持ちません。

### 足の踏み場がなかった昔の干潟

「干潟は貝や他の生き物で覆い尽くされ、裸足で歩けなかった」「歩けば、カレイやガザミを踏んづけた」「子供でも、1〜2時間の間に、バケツ一杯のクルマエビやウ



現在の球磨川河口干潟。砂が増え再生の兆しが見える

代海の恩恵に預かっています。

多くの市民がアサリやエビなど、八

40年代から徐々に消え、砂

ノカイが採れた」「アサリもハマグリも重なるようにいた」等々、八代地域に住む者は、漁業者でなくても、かつての干潟の豊かさを知っています。また、「河口付近でもお米は川で洗っていた(淡水は海水の上に乗っているため)」「水深4メートルにあらアマモの根元に産み付けられたイカやサヨリの卵の一粒ひと粒まではっきり見えていた」というほどに水は澄みきっていました。

「昔は沢山いて、今はほとんど見なくなったものはありませんか」と漁業者に尋ねると、ウノカイ(オオノカイ)を筆頭にマテガイ、マルニシ、ホウシヤビナ、アミゴ、クツゾコ、シシガイ、アオギス、コロビガイ、シヨンベンガキ、ネバゴチ、モチガイ、シシガイ...と、聞いたことがないような名前が並びます。「とにかく、なんでんかんでん湧いてくるごつおつた」のは間違いありません。

ダム建設当時、880名いた八代漁協の約9割ぐらいは、夏はエビ漁、冬はアサリで生計をたてていました。他の魚介類は、それを補う程度、もしくは自家消費のために採っていたようですが、干潟は一般市民にも開放され、戦後の食糧難の時代も含め、多くの市民がアサリやエビなど、八

荒瀬ダム建設開始と同時に影響が出たのは、河口のアサリやエビの養殖でした。セメントアサリや濁水により、大打撃を受けます。ダムが完成するころには、800軒ぐらいたった養殖業者は300軒ぐらいたままで減少します。その後、球磨川の影響を受けにくい場所に移動し、強いアサリノリに変えることで対応しますが、2割ぐらいたままで伸びていたノリも30割ぐらいたままでしか成長せず、ノリ養殖は断念せざるを得ない状況に追い込まれます。

中はそのヒントがあります。アサリにはある程度の砂がないと生息できないこと。覆砂をしたところは、間違いなくアサリが増えるが、数年してまた泥が増えるのアサリも立たなくなること。泥干潟が増えるに従い、砂地に卵を産み付ける魚や砂地を好む、いわゆる底ものといわれる魚がいなくなったことなど、砂の増減による影響を目撃してきました。

一方、平成14年に荒瀬ダム撤去が決定した後より、冬季2カ月間ゲートが開放されてきましたが、それにより確実に砂干潟が増えていきます。10年以上確認がなかったウノカイが確認されたのは、数年前から増えてきたタイラギは今市場に出荷されるまでになりました。また、ここ2〜3年は、ハマグリ

## ダム撤去は流域再生の鍵

日本初のダム撤去です。ダムの撤去が環境に与える影響に関するデータは、現在の日本にはありません。しかし、漁業者の多くの証言の

【つる・しようこ、環境カウンセラー、八代市】

つるさんのブログ「荒瀬ダムと川辺川ダムの現場から」  
<http://kumagawa-yatusirikai.cocolog-nifty.com/>